

主体的・対話的で深い学びをどのように創ったらよいか

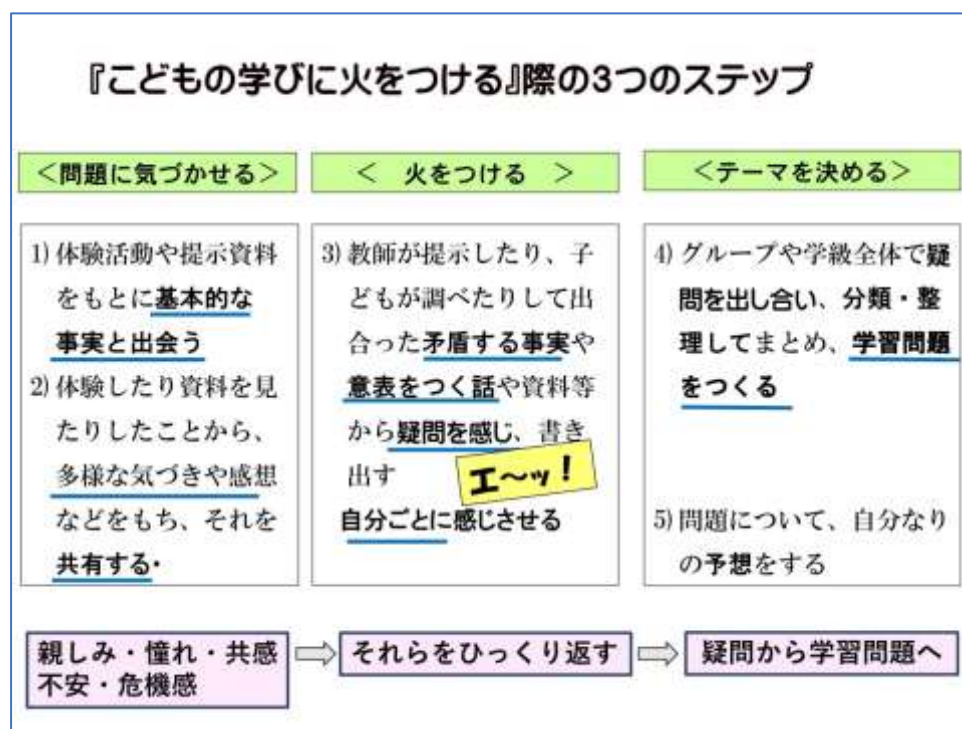
「子どもの学びに火をつける」

主体的・対話的で深い学びの実現をめざし、問題解決型の学習過程を進めるには、「調べる」「まとめる・実行する」「伝え合う」という活動を「教師が」させるのではなく、**学びの出発点として「学びに火をつける」という導入段階を重視する必要がある**。単元全体に関わる基本的な知識を知ると同時に大きな問題意識を共有し、学習問題をまとめることで、その後の学習を方向付けるのである。

基本的には、「問題に気づかせる」「火をつける」「テーマを決める」という3つのステップを踏みながら、学習問題を作り、およその学習計画まで立てるのである。

問題に気づかせる段階では、単元全体に関する基本的な事実と出会让せるのだが、映像や体験等を取り入れ、気づきや感想を共有するなど、子どもたちの興味や関心を高めたい。

火をつける段階では、子どもたちのもっている常識あるいは既知の内容と矛盾するような事実や意表を突くような話、あるいは資料と出会让せることで、「エ〜ッ！」という思いを抱かせることが重要だ。知識を並べただけでは疑問など出てくるわけもないのだ。その疑問を整理し、その重要度を検討する中から中心になる「学習問題」が浮かび上がるのである。



「子どもの学びに火をつける」具体例

例えば小学4年生の社会科「水と私たちの暮らし」の学習であれば、断水が続いて困っている報道資料を示し、どんな状況だろうか、〇日も水が使えない中でどんなことに困っているのだろうか、一人ひとりが考え、書きだしたメモを元に仲間と話し合ってイメージを広げたり映像で確かめたりする。水が出ないだけで様々な困難が広がることを実感することが、

この単元の出発点である。さらに「実は、私たちの町でも〇年前の夏に断水が続き・・・」などの事実を示し、水が使えなくなるという問題も、決して他人事でないことに気づかせる。



東日本大震災の際の仙台市水道局非常用給水所



火をつける段階では、各班に白い紙とその上に水の入ったA B 2つのコップを配る。それだけで子どもたちは興味を示す。A Bを比べて気づいたことをまとめさせる。それを全体で共有する。色やにおい、透明度、細かなごみや沈殿物等にも気づきが広がる。「飲むとしたらどちらにしますか」と問いかける。「実は両方とも君たちが飲んでいる水ですよ。」と教えると「うえ～！」と言い出す子もいる。浄水場の取水塔付近と、水道の蛇口から流れる水の写真を示し、どちらがどの水か問いかける。その後に疑問カードを書かせてまとめると、この単元で子どもたちの学びたい内容が明確になる。同じ内容のカード毎に分類整理し、見出しをつけながら構造化すると、学習問題が明確になる。教師の学ばせたい内容と重なりとありがたい。学ぶ順番や、学び方を整理すると大まかな学習計画ができる。このようにしてテーマが決まれば、子どもたちは「自分たちの問題」として主体的な学びに取り掛かることになるのである。

取水塔の水がきれいな水道水として蛇口から出るとしたら、その間はブラックボックスになっているわけで、その中間でのしくみが知りたいというのは必然的な問題意識であろう。



「調べる」際に東京都水道局の水道キャラバンなど関係機関と連携を取り入れ具体的に刺激的な学びを創るのも重要である。

また、この学習の発展として、総合的な学習の時間でSDGsの6番「安全な水とトイレを世界中に」を取り上げて学びたくなるのも自然な流れである。総合的な学習（探究）の時間においても、上記のような問題解決的な学習過程、特に「学びに火をつける」場面の研究や工夫をすることで、日本の子どもたちの主体的な問題解決力を一層高めていただきたい。

時事通信社「内外教育」2024年4月12日発行に掲載していただいた手島の記事（部分）に写真等の資料を加えて再構成したものである。